

関連専門職演題（ポスター） 脊髄損傷

2016年6月9日(木) 15:40-16:40 第14会場（1F さくら）

[座長] 吉田 輝（鹿児島大学病院リハビリテーション部）

[座長] 長谷川 隆史（労働者健康福祉機構中部労災病院中央リハビリテーション部）

8

高位頸髄損傷者の机上動作に求められる手掌部の向きと前腕回内位保持の重要性

徳井 亜加根:1、井上 美紀:2、前野 崇:2、飛松 好子:2

1:国立障害者リハビリテーションセンター学院義肢装具学科、2:国立障害者リハビリテーションセンター病院

【目的】高位頸髄損傷者の机上動作獲得のために、ポータブルスプリングバランサー（以下、PSB）やBF0を使用して、上肢のリーチを増大させることは一般的であるが、机上動作を行うために必要な自助具は手掌部に装着するものであり、手掌部の向きも机上動作獲得のためには重要な要素の1つと考えられる。PSB及びBF0使用時の手掌部の向きは、主に肩関節外転および前腕の回内外運動に影響を受けるため、これらの運動と机上動作との関係について検討した。【対象】当センター入院中の高位頸髄損傷者2名（C4不全麻痺男性1名、C5完全麻痺女性1名）および健常者2名（男性1名、女性1名）とした。

【方法】頸髄損傷群は日常使用している前腕回内位保持装具およびPSB、健常群は万能力フ付き手関節固定装具を用いて、食事動作、タブレット操作を行い、肩関節外転角度、前腕回内外角度、手掌-机上面角度の変化について動画解析を行った。【結果】食事動作においては、2群間で肩関節外転、前腕回内外角度変化に有意差が見られたが（ $p=0.00$, $p=0.01$ ）、手掌-机上面角度は、いずれの群も一定の範囲内に保持されており、変化量に差は認めなかった（ $p=0.07$ ）。【考察】各机上動作において、肩関節外転、前腕回内外角度に関係なく、いずれの対象者も手掌部の向きを一定に保持していることから、肩関節外転機能が低下している高位頸髄損傷者において、装具等を用いて任意の前腕回内位に保持し、手掌部を机上動作に適した向きに保持することは、動作獲得のための重要な要素と考えられる。